**日本を語りたい人のためのキーコンセプト**

**「日本文化をより豊かに発信するために」**

 文部科学省顧問　元パリ日本文化会館館長

　　　　　　　　　　　　　　　 竹内佐和子

　序論

　日本の文化をどう海外に発信するのか。ユネスコの世界遺産の登録に各国がしのぎを削っているように、文化財の活用をめぐる戦いは激しさを増している。フランス、英国、ドイツなど先進各国に加えて、昨今は中国、韓国などアジアの国々が、自国の文化の発信に膨大な予算を割いて、海外発信に力を入れるようになっている。また、見える文化財から、 無形文化資産の活用にまで話は広がり、文化資産の知財化や、文化産業の創出、文化を使った都市づくりなどについての議論が盛んになってきている。

　こういったことを背景に、日本の文化政策は大きく方針を転換し、伝統文化の保存から、文化資源を活用した産業や地域経済の活性化を政策の目玉にするようになってきた。 2011年には｢文化芸術立国｣を目指すことが宣言され、2015年には文化庁の機能強化のなかに、文化資源を活用した持続可能な社会の構築という大目標が書き込まれた。

また、2020年のオリンピック・パラリンピックの開催のときには4000万人の観光客を見込んでいるため、日本文化のソフトパワーの戦略的な活用は、地方創生の目玉になりつつある。

こういった追い風のなかで、世界に開かれた日本を効果的にアピールするためには、一定の方法論や体制の整備が必要である。特に、これからの文化発信は国外ではなく、「国内」が政策の実践場所になるため、それに焦点を合わせた体制づくりが大事である。外国人にとっても、日本の風土に実際に触れながら日本文化を理解するほうがずっと認識は深まる。これにともない、文化資産を資源として評価する仕組みをつくり、そこに産業政策を加味して、海外への影響力を拡大するという「内から外へ」の政策が重要になる。

これらを踏まえると、日本文化力を活用するためには、次の三つが重要になる。

　①日本の文化資産をどう新産業の創出に転換できるのか。

　②地方ごとの特徴を独自の切り口で発信するのか。特に地方創生という観点からは、各地で、地域独特の歴史を加味し、日本文化のさまざまな顔をどうアピールするか。

　③文化の演出家、カタリ手をどう育てるか。文化の活用を考えるプロフェッショナルな人材をどう育成するか。

昨今、日本文化に関心をもつ人々が増加しつつあるが、その発信方法は、浮世絵やマンガなど断片的なものが多く、日本文明をソフトパワーとして活用するための方法が普及しているわけではない。

また日本文化が「和」を重んじ、自然との共生を大事にするなど独自の要素があるとはいえ、日本文化には、中近東、インド、中国、西洋から、きわめて多くの文明的要素が流れ込んでいるために、日本文化を特徴づける一定の切り口を見つけておかないと説得力が乏しい。文化の形式や表現方法についても、日本文明には、西洋文化に見られるような物語性と、哲学的なロジックが十分あるが、それらを西洋やアジアとの対比で、語れる人が少ない。日本が文化芸術立国として、国際社会で日本文化をどう発信するには、一定の指南書が必要になってきている。

この指南書は、日本の文化を「言葉なり」「思想として」プレゼンテーションするためのもので、日本の文化様式や基本概念を抽出したうえで、海外発信するための手引き書である。特に、文化はグローバルな時代であればあるほど強く意識されるので、その手引書こそが日本の魅力の決め手になる。

そのために、本指南書では、日本文化を語るために、「歴史」「概念」「組み立て」という三つの軸をたてた。さらに、歴史カテゴリーからキーコンセプトを抽出した。キーコンセプトとは、縄文と弥生、狩猟と農耕、公家と武家、天皇と将軍、仏教と神道、西洋化と国粋主義などで、歴史の担い手を二つの軸で切り分けて語るための道具である。また、仏教や神道についても、地蔵菩薩や不動尊、神仏習合などにみられるように、二つのさかい目が消えて、社会のなかで複層的に根付いている場合も多い。

地域ごとに、こういった「対語コンセプト」を用いて、地域に残る文化の特徴を引き出し、それらをデュアルスタンダート（合わせの論理）のマトリクスでつなぎ合わせる。

日本では哲学も文学も職人芸も、美意識や民衆救済思想と有機的に結びついてきた。また、各地の風習や言い伝えの中には、土地の神様がたくさん根付いている。そういう、地方に眠るいろいろな伝説や民話をきっかけに、日本文化を掘り起こしていけば、何層にもわたる文化の蓄積（多層性）や、その底に眠る深層心理を掘りあてることになるだろう。

地方創生と日本文化の発信は、そういう歴史的、複眼的視点から構成すべきものであり、そのほうが一層効果的な企画や演出にたどりつけるし、世界からのリピーターの増加など持続可能な観光振興に結び付くであろう。

　そこで、日本文化を体系的に理解するために、３つのアプローチを改めて説明したい。

　第一に、「歴史編」。これは、特に時代の転換で起こった価値観の転換に着目する。

　第二は、「概念編」。外国人の認識を惹起するためには、日本の歴史を貫く用語や概念をできるだけ対語として抽出し、その概念を深く掘り下げる。

第三は、「組み立て（みたて）と統合編」。上記の歴史編と概念編を用いて、地方ごとに残る文化財を用いて特徴だしを行い、それを地方発の企画や編集に生かす。これは、日本人同士で、当たり前のように認識されている日本文化や文化財を、海外発信用に「組み替える」作業であり、そのための要素の統合の仕方を考える。

この三段階目の作業のためには、地方文化の活性化を強く意識して、各地でケーススタディづくりの作業に着手してもらいたい。奈良時代に始まった風土記編纂の手法なども一部使える。風土記は、日本の文化史からみて、地域を特定して、歴史を書き残した画期的な編纂方法である。その歴史は、奈良時代初頭にさかのぼり、日本の地名は二語に統一され、日本全体を「道」を中心に山陰道、山陽道、北陸道といった具合に10数個（[五畿七道](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%94%E7%95%BF%E4%B8%83%E9%81%93)）に区切ったうえで、豊後、伊勢などの場所を特定して、土地の特徴をまとめた。その中には、神社の位置や伝承、土地の植物や鉱物、色彩などが詳細に記録され、現代でも役立つ要素がある。5つの風土記が残っている。

文化資産には、常に過去から未来へ、記憶をつなぐ役割がある。その意味で、文化資産を読み解くことは、平成の文化資産の棚卸作業であり、「平成の風土記づくり（仮案）」ともいえるだろう。この作業は、過去と現在をつなげ、さまざまな地方の文化を横につなげる役割も担うので、そういったストーリーを作れる人材を育成したい。

一例をあげよう。天皇制にも関係する「政（まつりごと）」は、お祭り、もてなしなどさまざまな要素があるが、これらの束を、１０００年、２０００年をとおして見てみると、そこに文化の蓄積が見えてくる。武家が、例えば信長、秀吉、家康が能を式楽にして政を継承しようとしたのはなぜか。まつりごとには、様々な仕組み、手順などが、たくさん残っている。現代の風土記を書こうとすれば、それらの要素がもう一度浮上し、角餅、丸餅、白味噌の雑煮、芋正月とつながってくる。それぞれの地域に「政（まつりごと）」が分配されているので、文化的にみれば、日本は決して中央集権的ではなく、地方分権の国である。ただ、近代を経て、政教分離という大きな壁のなかでは、こういった文化の多様性が見えにくくなった。

また、日本文化は、世界の文明との重なりのなかで共通要素を多く含んでいるとはいえ、一定の独自性があり、国際社会という視野にたてば、多元的な文化のなかの一つである。それは、日本語という一定の言語の枠組みの中で継承されている[[1]](#footnote-1)。これを世界の多言語の体系のなかでは、相互に認識できる表現を探しだす工夫もいる[[2]](#footnote-2)。

　西洋文明との連なりという点では、西洋の知性の吸収が、どういう日本型イノベーションにつながったのかという点も興味深い（萩原朔太郎、西田幾多郎などの意見）。日本の文化デンティティーは、国内では特に問題にならないが、海外から見れば、日本製品のブランド性にも直結している。ただ、文化力の醸成は、政府だけでは不十分であり、民間とも十分な連携が必要だろう。海外で特に関心の高い日本の文化資源はまさに「国」という単位の競争力を維持するための投資先である。その観点から、各機関と連携して、一過性のプログラムに終わらないような進め方が大事であり、日本人として、海外に向けて、日本文化を語るための最低限の教養を身に着けておくべきだと思う。

　個人的にいえば、パリ日本文化会館の館長として、2011年にフランスに渡ったとき、日本文化はどのようにフランス人に認識されているのか、日本文化をどう体系的に伝えることができるのかに関心があった。数年経ったのち気が付いたことは、フランス人の日本認識や理解のほうが、より深く、より体系的だった。フランスの文化という違った文化背景をもっているからこそ、異文化を理解できる能力と高い関心を持ち続けられるのだろう。

　5年間の仕事を終えて、帰国したときに、日本人としては、日本を語る方法をもっておかなければならないこと、海外の方々の関心にしっかり答える努力をしなければならないということを痛感した。その点から日本を語る知識人を探したところ、松岡正剛氏の「日本という方法論」という柱の立て方が、もっとも有効な論理的枠組みだと思った。その後、松岡氏とは何回も議論を続けた。以下の指南書は、その議論から、多くのことを学びつつ、日本文化の認識方法の基礎を提示したものである。

第１章　「日本のコンセプト」を歴史から学ぶ

この章は、日本の文化コンセプトを歴史の流れに沿って区分したうえで、その特徴をとらえようという試みである。「文化は社会の関数」と、人類学者クリフォード・ギアーツは定義したが、文化の歴史は社会の変化と強く結びついている。歴史の大きな変化を見ることによって、どんな価値観が時代を主導したのか、なにゆえ、時代の転換が起きたのかということが容易に想像できるようになる。

特に、世界の文明との対比は重要なポイントで、国の上層階級がどういう特徴をもっていたのか、海外との交易、モノづくり、職人技、食べ物の変化などは、上層階層の立場を変化させ、民衆の力の形成にも大きく影響した。そういう特徴全体が、日本というアイデンティティーを形成している。これらを歴史に沿って理解することで、日本文化を体系的に表現できるようになるだろう。

そこで、まず、日本の歴史を５パートに分けて、時代の転換と、文化の重なりに着目した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

**1）縄文文化から弥生文化へ**

　縄文文化と弥生文化は、日本文化の基層を知るうえで、決定的な役割をもつ。日本民族は農耕社会から発生したので、村社会を中心とする集団主義が発達したと説明されることがあるが、これらはむしろ稲作が伝わった弥生時代以降の特徴から引きだされている。弥生時代より以前の縄文文化は、梅原猛、民俗学者の柳田国男、折口信夫らが指摘するように、日本の文化芸術を一万年にわたって貫く柱である。縄文文化の理解なくして、日本の文化を理解することはできない。

＊縄文文化とは、紀元前１２０００年 ― 紀元前６０００年前の文明で、緑の文明、自然と共存する文明とされ、樹木文化（建築物、樹皮の利用）、堅果類（ドングリ、トチ、クリ）の利用と管理方法が発達した。狩猟民族で、東北に多く特徴がみられる。

また、神々の世界、山の神、アニミズム、シャーマニズムの世界があり、悪霊を追い払うために、結界を設けて、日常人間界と非日常神界が呪術的なレベルで交流する。山中他界、山人の源泉もここにあり、流水文、水や風など文様は悪霊払いと関係がある。

＊弥生文化は、農耕文化・文明が進入したあとの文明で、支配者弥生人（アマテラスオオカミ）、被支配人縄文人（すさのおのみこと）が併存する。稲作文明であり、共同作業のために低地性の集落（環濠集落など）が形成され、ものづくりとしては、青銅器や鉄器が登場した。

**2）奈良から平安へ**

この時代は、日本文明の興隆期であり、日本という国家意識が形成される。この国家意識は、飛鳥・奈良時代を通じて天皇制のもとで仏教中心に強まるが、平安時代には、この仏教文化は「和風」文化へと転換する。

**奈良時代**

奈良時代、古事記や日本書紀が編纂され、日本誕生の経緯が語られる。日本誕生のストーリーは、イザナギ（伊耶那岐）、イザナミ（伊耶那美）から始まり、風・木・山・海・川・岩・石・火にまつわる神々が登場する。火の神は、溶岩、噴火、温泉を恵むものと考えられたので、日本の自然観をよく表している。火の神の仕業でイザナミは絶命してしまうが、そのあとイザナギによって、アマテラス（天照大神）が産まれる。アマテラスは太陽を神格化した神で、伊勢神宮に祀られ、皇室の御祖先として崇められている。女性神として描かれることが多い。古事記の序盤は神話そのもので、ギリシャ神話との関連を連想させ、外国人の関心は特に高い。

こういった記紀の編纂をきっかけとして、「国」という意識が誕生し、国名も倭国から日本国へ変更された。507年には継体天皇（天皇のルーツ）が出現し、天皇制のもとで仏教による国造りが進み、律令制による中央集権国家の形が確立していった。聖徳太子の17条憲法、冠位十二階は有名で、天武、天智天皇時代の国号制定、大化の改新、太政官制へと進み、古代官僚制ができあがった。

美術、建築の分野では、飛鳥様式を通じて、ギリシャ、ペルシャ、ユーラシアの文化とつながり、ヒンズー教やインドの世界観を共有すると同時に、アジア全域の仏教の影響を受けた。仏教建築が進み、巨木を活用した大型建造物・大仏の建立をきっかけに、アジアとの外交関係は広がり、アジア的価値観を背景に大仏信仰は地方へも拡大していった。日本の「国」という意識の高まりにより、中国と対等意識も強まった。

食の面では、米の主食化が起こり（一般市民はまだ）、「米と魚」が常食され、動物食は禁忌された。

文字文化という点では、漢字の導入により、古事記、日本書紀などの編集[[3]](#footnote-3)が進み、同時に、万葉かなが作られ、漢字と万葉かなの並列処理能力が拡大に進歩した。

伝達手段の面からも文字の発達により、口承による伝達ではなく、文字伝達が始まった。また、漢字の導入により、一字で多義的内容を示すこともできるようになり、時間と空間をまたぎ、国境を越えた伝達ができるようになった。

ものづくりの面では、植物染色（草木染）、特に藍と紅色の染色が始まり、日本を代表する花として、梅から桜への転換が起こった。

**平安時代、国風文化。遣唐使廃止と、日本の美意識の原型誕生。**

　　平安時代は、中国文化との距離を見直し、和風の国風文化を作り上げていくプロセスである。８９４年、菅原道真の提案で遣唐使が廃止され、和風化がさらに本格化した。

和風化の一歩は、伝達手段の革命である。文字伝達のためのフォーマットが多元化し、漢字（真名序）に加えて、「平安かな」が発明され、漢字（真名序）と仮名序の併記が広く使われるようになった。文字に加えて、絵画（絵巻物）が加わり、物語と絵巻を同時に使うことによって伝達能力が飛躍的に向上した。

こういった文字革命を背景に登場したのが女房文学である。「平安かな」を自由に使いこなし、宮廷の教師役として仕えた女房達によって、日本文学の基礎が築かれた。紫式部は源氏物語、清少納言は枕草紙などの名作を残し、ここに描かれた情感や美意識、みやび、うつろい、無常観、「もののあはれ」といったコンセプトは、日本文化の源流となって、その後1000年以上にわたり日本文化をリードする。

平安時代の絵巻物に登場する挿絵は、その後の浮世絵、漫画、アニメなどとも連なっていくことにも注意したい。

　この時代、中国から伝わった仏教も日本文化の底流を作り出す。最澄と空海という二人の高僧により導入された密教は、天台宗と真言宗という形で普及し、日本の仏教美を築く。大日如来を中心とする宇宙認識、曼荼羅などが、仏像彫刻、壁画デザイン、仏教建築を通じて、今日まで日本文化の意識構造を提供した。

仏教の「極楽浄土」思想は、宇治の平等院、中尊寺金色堂をはじめとして、庭園文化にも影響を与えた。山中他界が都に降りたともいわれるが、中国的な仏教思想が日本の民衆信仰へと形を変えて波及していくプロセスを示している。

　食の面でも、いわゆる「和食」の原型が出来上がった。

**３）　いざ鎌倉へ**

平安末期から、鎌倉時代に移行する時代は、王朝文化から武家文化への転換を示す大事な時期である。

特に、武士の登場は、日本史を大きく書き換える。最初は、天皇の私設警備団だった武士たちは、武家という自立した存在へ転換する。中世を通じて、この武士の価値観や生活感が、日本文化をリードし、古代アニミズムは解体され、侍の道理、リアリズムが前面に押し出される。

　滅私奉公の論理が主従関係という縦の権力関係を作り出し、武士の論理で進む幕府の論理と朝廷との対立という構図が出来上がった。銅山開発も加速し、貨幣流通によりモノの流通が拡大し、取引や輸送、流通を牛耳る集団が力を持ち始めた。

　宗教的には、この時代に栄西、道元などにより、禅宗が導入され、茶の文化、水墨画、五山文学などが日本文化をリードした。禅宗は、京都比叡山から、北陸、永平寺を中心に一大勢力を築く。禅宗は、日本の哲学の基礎となり、鈴木大拙によって「日本的霊性」へと高められ、のちのち日本文化の思想性を説明するものとして世界に影響を与えるようになる。

宗教的には、禅宗は、土地の神々と一緒になって、神仏習合、本地垂迹（ほんじすいじゃく）思想へと発展していった。神道集（中世、南北朝時代－14世紀）によると、神社を祀る「神道論的」なものと、八百万の[神々](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E)が化身として[権現](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A8%A9%E7%8F%BE)（ごんげん）するという「垂迹縁起的なもの」が、次第にくっついて、それぞれの土地の独特の宗教観を生み出していった。

これらのストーリーは、室町期の御伽(おとぎ)草子，江戸期の[浄瑠璃](https://kotobank.jp/word/%E6%B5%84%E7%91%A0%E7%92%83-79997)へと発展する。

食の分野では、二毛作が始まり、牛耕、刈敷（肥料）などの農業技術が進歩した。また味噌、醤油などの発酵食が体系化していく。

**４）　室町から江戸へ**

　　室町時代は、足利義政の東山文化を中心に日本のルネッサンスが開花した時期である。この背景には、武士に変わって、町衆がリードする形で、民衆自治、自治権、楽市楽座、自治都市の形成という形で、日本の文化勢力図が変化する。

海外との交易も盛んになり、秀吉の時代には、茶の湯は政治の道具にもなり、黄金の茶室の活用、千利休と合同でプロデュースする寄り合いの茶が政治の舞台に登場した。南蛮渡来の食文化（てんぷら、カステラなど）、鉄砲・大砲、キリスト教の生活様式などが、西欧からもたらされ、アジア貿易の面でも、朝鮮半島、明との貿易も盛んになった。国内でも北前船のシステムが確立し、船、積み荷の集荷、寄港地の整備などによって、日本全体の流通網ができあがっていった。

茶の湯の世界でも、唐物（中国から輸入）と区別される形で、楽焼に見られるような手捏ね（てづくね、てづくり）といわれる非対称的な形が珍重されるようになった。各地の「土」の材料にこだわった陶器制作が進み、「わび」茶の境地が、日本文化に新しい価値観を作り出した。

江戸期に入り、戦争のない平和な時代が現実のものになると、日本文化は円熟した美意識の形を極めていく。江戸城の完成（1639）により、江戸にも文化の中心ができて、徳川将軍家による江戸の文化と公家による京都の文化という二つの文化が拮抗し、違った顔をもつ文化を出現させる。

京都を中心とする上方では、豊かな豪商と公家による文化ルネッサンスが進み、和事、優美で繊細な芸風、織部、小堀遠州などの巨匠による茶道具や庭園づくりが進んだ。絵画の分野では、狩野永徳がリードした狩野派に引き続き、本阿弥光悦、俵屋宗達、尾形光琳など琳派の作風が日本の美術に一大革新をもたらした。これらが今日の日本文化を貫く美意識、パターン化した意匠デザインの礎を築いた。

江戸では、江戸城を中心とした都市計画が進み、文化面では、歌舞伎の中村座が創設されるなど、西鶴、近松などが歌舞伎の題材になった。江戸後期には、江戸の「いき」「通」といった言葉とともに、江戸の美意識、生活スタイルが普及した。

江戸の人口は拡大し、食の市場も急激に拡大し、大衆文化をリードする江戸錦絵や、浮世絵が普及した。文化リーダーたちも、公家の階層中心ではなく、江戸のアーティストと商人が、庶民が手には入るものを大量に流通させる大衆文化市場へと発展した。一方で、高級な工芸品は、幕府や公家、寺院の御用達のような形で、大衆文化とはやや違う形で発展した。ただ、工芸品市場は、大衆文化の波には遅れたために、市場化の波にのれず、何度も衰退の危機にさらされ、今日も同じ問題を抱えている。

食文化の面では、江戸、大坂の米問屋を中心とする「米本位制」が確立し、そのほかの樹木類等でも品種改良（桜、稲、菊、朝顔、尾長鶏、金魚）が進み、とくにソメイヨシノ、民間育種が拡大した。囲炉裏（いろり）が部屋のなかに設けられ、また竃（へっつい、かまどのこと）という形の調理場が普及した。

**５）江戸幕府から明治維新へ、グローバルな時代へ。近代日本の位置づけと戦争と平和。**

　　日本の近世を形作る江戸時代は、文化面では庶民文化に裏付けられる形で豊かに発展した。しかし、明治維新をもって始まる「近代日本」を形作っていく時代は、松岡正剛氏によれば、近世までの日本文化を理解する分断装置にもなっているという。そのくらい、飛鳥以降の1500年の歴史とは隔絶した社会文化を生み出した。日本の近代がどういう課題と特色をもっていたのか。以下、近代を形作った価値観とはなんだったのか考えてみたい。

日本の産業社会は、西欧中心で進んだ産業革命、工業化という面では、歴然とした遅れがあった。黒船の到来、明治維新を機に、その遅れに気が付いた日本は、急激に西欧文明に接近し、東洋の民主主義の国を目指して、さまざまな制度を導入した。立憲君主内閣議院制を導入し、富国強兵、殖産興業を推し進めた。世界との関係を見直し、日本の立ち位置を決めるため、福澤諭吉「文明論の概略」、和魂洋才、「脱亜入欧」、大正デモクラシーなど、伝統とモダニズム、日本様式と西洋様式を接合させるためのさまざまなロジックが出現した。

それらを背景に、世界のグローバル化に対応するため、度量衡を変え（尺貫法→メートル法）、標準語を制定、鹿鳴館の建築、帝国ホテル創業、産業面では富岡製糸所、水力発電所に始まり、石炭鉱山の開発、農業生産の増加（農事試験場の設置）、肥料工業の育成、鉄道敷設へと続いた。

一方、思想的には、列強に対抗するという意味での明治の日本主義が強まり、神仏分離、廃仏毀釈以降、国家神道の流れが強まった。教育勅語が制定され、日本の「国体」思想が深まった。

結局、西欧の産業レベルとの違いを十分意識しないまま、アジアへの拡張主義に押されて再軍備、太平洋戦争へと突き進んでいった。そして、第二次世界大戦の敗戦を迎えた。

これを機に、国体の大きな転換が起こる。日本国憲法、戦争放棄、婦人参政権、象徴天皇への転換し、経済的には、復興経済の中で戦後食糧難に対応するためパン食、学校給食が導入され、出稼ぎ、集団就職も行われ、公団住宅などの住居のスタンダード化、生活の洋風化とともに、60年代以降の高度成長へと突き進んでいった。人口増大による巨大な食需要に対応するため、魚の養殖、促成栽培なども進んだ。これらは、日本の食文化に多大な影響をもたらした。

　一方、思想的には近代国家の確立へ突き進んだ時代が、日本文化の面でどういう課題を残したのか。それらを慎重に抽出する必要がある。西洋からの技術導入にあたって、江戸時代まで蓄積された「技能性」職人芸と近代技術はどうつながったのか。「茶の本」を著した岡倉天心は、日本的美意識と西洋美術の融合をどう推し進めるべきか、自問自答した。この時代は、思想的には西欧一辺倒ではない日本の在り方、価値観をみきわめる時代でもあった。

　近代とは、欧米列強に対抗しアジアに拡張していった政治経済体制の動きと、日本の文化芸術の分裂状態が顕在化した特殊な時期である。

敗戦を迎えた日本は、日本文化の位置づけ、歴史的伝統を再確認しないまま、戦後の経済成長と、それを中心とする外交戦略へと突き進んでいった。その分裂状態は今日もなお続いている。日本のコンセプトの海外発信というのは、そういう分裂状態をどう乗り超えるのか、近代によってゆがめられたナショナリズムではなく、それ以前の日本の文化の価値観にどう立ち返るのか、それを問い返す作業である。

第2章　概念編（日本文化を形作るキーコンセプト）

　第1章の歴史編をみると、時代の重なりや外国との関係で、日本文化には常に二元的な構造が隠れていることがわかる。この二元的な構造こそが、日本文化のパラダイムシフトをもたらし、地方文化の違いや特徴を作り出している。以下では歴史論から抽出されたキーコンセプトを対語的に紹介しておく。

これを使うことによって、地域文化をストーリーで語るときの柱が立てやすくなる。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

①神々とオニ、邪気。日常人間界と呪術的非日常神界。

―縄文時代の流れで見ると、山の神、田の神、異世界からやってきた精霊、山人と、邪気の噴出が並列的に存在する。民族伝承、民俗学の基礎、近代合理主義の以前の文化を示す。

―ハレとケなど、聖と俗、シメナワ、鳥居などの結界によって聖山を区別したり、聖水で邪気を払ったり、豊穣を願う祭りの源泉もここにある。前方と後方（おしやられている人々）の区別もある。

②天と地（と人）、身体性と身体性を超えるもの。

―天と地は、日本文化では特殊な意味を持つ。外部からの来訪者というまれびと[[4]](#footnote-4)信仰や、[自然崇拝](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%AA%E7%84%B6%E5%B4%87%E6%8B%9D)、[精霊崇拝](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B2%BE%E9%9C%8A%E5%B4%87%E6%8B%9D)（[アニミズム](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%8B%E3%83%9F%E3%82%BA%E3%83%A0)）によっても説明できる。これに伴い、神をお迎えする宮（御屋）と都（宮の庭）、斎庭（いつきの庭）、神事が生まれた。

―神話、イザナギ、イザナミ、アマテラス、スサノオ、天の岩戸の物語などは、西洋の神話と対比される神々誕生のストーリーである。

―「おきな＝老翁」は神と交信する存在。ここに天と地のベクトルがつながれ、神々が身体性をもつプロセスが描かれる。能や狂言は、神を下ろす作業の一つである。

③男文字と女文字、和と漢

―漢字と平安かなの並列。平安時代につくられた仮名は日本文化の基礎をなすもので、和歌、物語、日記など多数の文学を作り出した。これは書の革命をもたらし「古今和歌集」「新古今和歌集」という名作をもたらした。

―漢字（真名序）と仮名序の組み合わせで、和漢折衷、境目をなくす作業が進んだ。書は、日本の美意識の源泉であり、音、字、形の組み合わせを楽しむものとして、絵巻物が加わる。これにより短い表現、コンパクトな伝達方法が発明された。アート表現の起源ができあがった。

④伝承型「カタリ」と記録型「語り」

―女房物語の代表格、紫式部の源氏物語、清少納言の枕草紙など、平安かなによる記録型かたりで、各地の翁による伝承型「カタリ」が並列して存在している。

　「神代より世のある事をしるしおきけるなり。日本紀などはただそばぞかし、、、」

⑤神と仏、神仏習合

―神仏習合とは、7世紀後半からの仏教と神祇信仰（主に土着の信仰）の重なりによってできている信仰体系をいう。神の普遍性をいう「山川草木悉皆成仏」などの表現で語られる。極楽浄土も参照。

⑥もの」の解釈

日本文化において、「もの」とは「物」でもなく「霊」でもない。物質と精神の「もの」が混然一体に混じったものをいう。もののけというのは、ものの気配というが、日本の古典や民間信仰において、人間に憑いて苦しめたり、病気にさせたり、死に至らせたりするといわれる怨霊、死霊、生霊など霊のことである。妖怪、変化（へんげ）などを指すこともある。

「御時に、もののけが出現、無常がはびこる。平安王朝『源氏』という物語を外から支配していた「もの」。古代的な「もの」が平安期に「人に憑くもの」に変質（松岡）。「ものいう、物語、物まうで、物見、物いみなどのいうたぐひのものにて広くいふ時に添ふる語」【宣長全集5】次の「もののあはれ」に発展する。

⑦もののあはれとあっぱれ

宣長の説明が有名で、『源氏物語』を、「もののあはれをしる」という一語に集約し、物語全体の美的価値を一つの概念に凝縮させた。「あわれ」とは「見るもの、聞くもの、ふるる事に、心の感じて出る、嘆息の声」。【宣長全集5】

寄物陳思。物に寄せて思いを陳[の]ぶこと。武士のいいかたが、「あっぱれ」。

⑧無常と永遠

　鴨長明　「方丈記」　"ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。"　無常とは、老荘思想の「無為」とも異なる、うつろいのことで、永遠とも通じている。

⑨無と有、「空」と「余白」の意味

書の世界で空海が「呼吸」を導入し、水墨画で雪舟が「のび縮みする空間」をイメージさせた。構成のなかの美、不完全性の美学が確立していく。時間的には「間」ともいう。松林図屏風（長谷川等伯）などにも通じる。

岡倉天心の表現によれば、「故意になにか立てておかずに、想像のちからでこれを完成させる。こころにてふさぐ。「間」とは、何もないのではなく、つながり。対構造の中のテンション。二つの片方を両方含む状態」である。

岡倉は茶の本で、「茶道の要義は『不完全なもの』を崇拝するにある。いわゆる人生というこの不可解なもののうちに、何か可能なものを成就しようとするやさしい企てである。宇宙に対するわれわれの比例感を定義する。それはあらゆるこの道の信者を趣味上の貴族にして、東洋民主主義の真精神を表わしている」と説明した。

⑩寄り合いの茶と侘び茶

―寄り合いの茶（殿中茶の湯）は、かざりを尊び、人々が会う場所を大事にする。絵画や唐物を持ち寄って、楽しむサロン文化（床飾り、書院飾り、棚飾りなど）である。豊臣秀吉の黄金茶室などから発展した喫茶文化であり、のちに王朝美学を形成する。歌合わせ、色合わせ、言葉合わせ、香合わせ、それが発展して「競い、きそい」にも通じる。宇多天皇の宮廷サロンが有名である。

これが発展して、金沢などでは「きれい寂び」という別の基準もできた。文化の理解者で国宝級の文化財を集める「数奇者」という人々が、文化の保護者として活躍する。和漢の境地を融合することが一つのテーマである。

これに対して、「侘び」茶は引き算の美。草庵茶室。市中の山居。「月は照るよりも雲隠れするほうが情緒がある。枯れているほうがいい」というような考え方。禅宗の影響がみられる。

⑪対称性と非対称性

―茶の湯では、唐物と和物、例えば唐物茶碗と楽茶碗を対置させる。対称性と非対称性をくらべたときに、「手捏ね」（てづくね）のほうが自由度を意識させるというように、日本文化は非対称性と結びつけられる。

⑫みやびとひなび

―文化力の源泉。フィルターにかけて審美化する能力。京文化、公家文化は「宮ぶる」「雅」、それに対して、対語は「ひなび」、みやびがないところ。鄙ぶるとは、いなかふうになること。

⑬貴族文化と大衆文化＝祭り、浄瑠璃、歌舞伎

能、連歌、茶の湯、作庭、立花などの公家文化と、神々が降りてくる祭り、土着の祭りが日本の舞台芸術を生んでいる。邦楽も重要で、尺八古曲は楽譜がない。相即即入の境地が大事で、寺院などで行われる音楽、声明などもその一種である。鎌倉から室町時代には「阿弥」たちのプロ集団が出現し、観阿弥、世阿弥などの人たちが日本の舞台芸術の原点をつくる。のちに歌舞伎、つまり既存の社会の枠外で変わったことをする「かぶく」人たちが、歌舞伎の舞台として発展した。伝統文化のプロ集団の原型である。

⑭縦社会（武家社会）と室町、座の文化。日本の民主主義の原点

日本型民主主義は室町時代の町人、職人の組合に源流があるように思われる。自由都市、自治都市、楽市楽座などは、縦社会の枠組みや地域の枠組みを超えて、自由な交易網を作り出した。貿易にたけた町衆は、民衆自治や自治権という意識を作り出した。日本の文化ルネッサンスの原点である。

⑮武家社会と公家社会

鎌倉以降に形成されたサムライ社会の封建道徳は、忠孝、いざかまくらなど、将軍など権威ある人々への忠誠心や秩序感を作り出した。これが武士道モラルとして世界にも浸透している。これとは別に王朝文化が存在しているので、日本文化はこれらの並列、融合した形としてみたほうがいい。金沢の例にみられるように、徳川将軍体制からの独立性が、文化によって築かれた武家社会モデルもある。

⑯彷徨と定住

旅人による文化は、花鳥風月の原点である。出家した人々による「数奇」と「無常」観は、西行や芭蕉の生き方に意識構造を作り出している。ネットワーク型の人たちは、定住型社会とは別に日本文化の価値観の底流にある。

　「また見ん交野の御野の桜狩り、花の雪散る春のあけぼの」西行

⑰京都＝上方と江戸、京都と東京

江戸初期以降、京都と江戸の二大中心体制ができたが、この対立軸は今も続く。東山文化（室町文化）に端を発する京文化は、和風と漢風文化の融合形式を大事にしながら、職人意識を継承している。一方、江戸時代にデザイン革命を通じて拡大した流通網は、その後量的成長を重視する大企業組織として発展した。それ以来、江戸＝東京は、経済成長のエンジンとなって拡大基調のメリットを強調する。

京の「みやび」（公家と京の豪商）と江戸の商業は、日本の政治経済を形づくる面白い対立軸である。一方、江戸には「いき」「通」などの美意識があり、日本橋界隈、浅草などの地域には、文化的伝統が根付いている。

⑱和魂洋才、西洋との付き合い方、西洋技術の取入れと融合

脱亜入欧という思想にみられるごとく、西洋との付き合い方をめぐって、今もさまざまな議論がある。洋画と日本画の融合、東洋美術学校の創設の背景を参照。アジアの中の日本と西欧社会の中の日本、技能と技術の融合、日本語重視か英語重視か、単一民族論重視か国際性重視なのか、常に二つの価値軸が現在も揺れ動いている。

第3章　地方文化の発信－イタリア、フランスから学ぶ

文化政策の大きな柱は、地方創生であり、地方文化の発信である。そのために必要な作業は、現在の姿を紹介するだけではなく、消えかかっている文化資源を活用して、大きなストーリーを描くことである。また、現在の県や市の単位では、特徴がでにくい場合は、歴史に立ち戻って、地域文化の違いを出す多元的アプローチをつかうべきである。

文化的多元主義について、フランスの経済学者ブルデューが興味深いことを述べている。文化というものは「場」である。場の力が強ければそこに人々は集まる。場の性質は、それぞれ異なった形をもつがゆえに、文化は多元主義の方向に向かう。これに対して、グローバルな経済の動きは、資本の力によって人々の価値観を一元的な方式で吸収する方向に動く。これによって、冨は偏在し、きわめて不均衡に発展するようになる。

現在の日本の姿は、グローバル経済のものさしによって、文化資源のありかとは無関係に関東圏に富が集中するパターンになった。これは、規模の経済の観点からは、正しいが、文化力による経済発展、情報発信という観点からすれば、不十分な体制である。これを是正するのが、地方創生という大きな政策目標であり、日本における文化的多元主義の考え方が、ようやく日の眼を見る好機を迎えている。

これに沿って、文化資源や文化力という考え方にも、再考が必要である。文化資源という考え方については、イタリアで用いられた「修復理論」というアプローチが参考になる。1999年10月、イタリアでは文化財・環境に関する法令を集大成し、そのなかで、「修復」を次のように定義した。

「修復とは、あるものの物質的無欠性（完全性）を維持するために、その文化的価値の保全や保護を補償するために実施される処置のことを指す」

これを支えているのが、ローマ中央修復研究所の初代所長チェザーレ・ブランディの考え方で、「修復するにあたっては、美術品が有する、いわば潜在的レベルで残っている統一性を回復することを目指さなければならない」というものである。

この統一性という考え方は、絵画、彫刻、家具、調度品などの美術品から、建築、広場都市構造、地区構造、景観へと空間的に拡張されていった。

この考え方は、日本語でいうところの「みたて」にもっとも近い。「みたて」という言葉は、茶の湯でよく使われるが、

①ある趣旨にそって、物語や故事・説話などに取材しながら、人物・風俗や場面設定などを当世風にして描くこと

②ものを見て選び定めることよって、あるものを、それと似た別のもので示すこと

などがある。

茶の湯の世界では、このみたてのために「目利き」という作業がある。目利きとは、あるテーマやアイデアに沿って、会合を企画し、掛け軸、茶葉や水、茶室・露地、主客と亭主の語りぶりなどのシナリオを作り、既成や固定概念を「捨て」て、新しいアイデアで表現を加える演出力のことである。「守破離」という思想で要約されるが、これは茶の湯だけではなく、日本文化全般にも通用する。文化は常に革新的なものを追う。文化は、常に保存ではなく、革新を求める。

日本の文化政策のなかで、どうこの手法を活用できるのか。政策的には、文化財活用・理解促進戦略プログラム2020の策定が進み、文化財を観光資源として活用する方針などがすでにある。このなかで関心を引くのは、文化財を、「人を引きつけ、一定の時間滞在する価値のある資源」と定義した点である。

また、日本遺産を100件程度選定し、地域の文化財を面的に活用した整備を押し進める検討も進んでいる。この延長に、文化庁の文化プログラムという構想があり、全国津々浦で文化イベントを20万件実施という戦略がある。人材面では、文化財を発端にした、面的な地域政策、および文化発信を進める「ヘリテージ・マネージャー」を提案している。政策的な柱は徐々にできつつある。

ただし、文化財の活用方法はいまだ明確ではない。日本文化には、無形のもの、有形のものがあり、能、狂言、歌舞伎など舞台もの、茶の湯や池坊のような限定空間を使った表現、文学、絵画、工芸品などあるが、解説するのは容易ではない。解説者も少ない。これからは、地元と地元以外の人々が一緒になってテーマを設定し、新しい企画演出方法を開発しなければならない。その場合の手法として次のことを進めたい。

　①日本文化を説明するキーコンセプトの活用

　②トレーサビリティー、歴史的ストーリー、時代の思想の活用

　③アーカイブ、文化財のデータベース、日本コレクションの活用

　④地域間のつながりを活用

　⑤海外発信に向けた演出、多言語対応

以上の方式を踏まえた企画が必要であろう。

フランスの文化政策は、以上の点からみると魅力的である。文化の維持・継承を政策的に発展させた国はフランスである。このスタイルは、日本の文化政策と異なっている。フランスの文化政策は、17世紀、ルネサンス期のルイ14世の政策から始まり、1648年には王立絵画彫刻学校がつくられ、対外的にも国内的にも文化を政治的コミュニケーションとして活用する形ができあがった。コルベールは、この学校を中心に、建築家、装飾、画家、彫刻家、家具やタペストリーの職人などを結集させ、フランス的様式美を確立した。

　その後、革命を経て、18世紀には啓蒙主義的な考え方が盛んになり、科学主義的な思考が加わってエンサイクロペディア（百科全書）が編纂され、芸術家の「サロン」が形成されるのなど、知的階級を巻き込んだ形の文化活動に発展した。政治的にも、フランス革命以降、文化財を絶対王制の産物とみなすのではなく、国民性の証左、つまり、民衆のものととらえる考え方が主流になり、芸術は民衆の啓蒙のために使われるべきだという政治目標が生まれた。

　19世紀には、文化財の荒廃が顕著になり、それに対応するため、中央政府内に、文化財保護と芸術家育成を柱とする限定的な組織ができた。しかし、第二次世界大戦後、こういった限定的な文化政策に対する認識は変化した。フランスの軍事的敗北が、共和制的価値の普及の遅れと市民意識の不足によるところ大だという認識がレジスタンス下の国民議会にて示されたからである。

これをきっかけに、文化を共和制的価値の普及と民主化運動の基礎にすえることが政策目標になった。文化を通じて、市民に広く自信を与えるため、大衆に向けた演劇政策がとられるようになり、演劇祭や大規模な劇場の建設が相次いだ。フランスにおいては、文化政策は、共和制的価値の普及というボトムアップ的な政治目標と結びついていた。

その後、第5共和政のもとで登場したのがアンドレ・マルローである。1959年、アンドレ・マルローは文化省を創設した。彼は、教育省のなかにある美術・文芸総局と、産業・商務省の国立映画センターを合併し、現代的な創造活動を奨励すると同時に、文化活動の民主化することに力を入れた。その一例が、地方圏に創設された「文化の家」であり、文化に市民がアクセスできるようにする構想だった。1974年には、地方レベルの芸術活動を促進するために、文化協定（市町村と文化圏）が出来上がった。

　一方で、1977年には、現代アートをメインとするポンピドー芸術文化センター、1980年にはオルゼー美術館がスタートした。

　この動きをさらに推し進めたのが、社会党のジャックラング大臣で、彼の時代に、電子音楽、料理、香水なども文化省の支援対象に加わった。この時期、文化省は、現代社会との関係をさらに強化し、オーディオビジュアルの分野の施策も始めた。この結果、文化省の一般会計予算は倍増し、政府の一般会計のほぼ１％に達した。地方分権と歩調を合わせるために地方文化会議も創設され、芸術教育にかかわる予算も拡大し、ルーブル学校など、芸術文化にかかわる教育機関が増大した。

　フランスでは、文化は特別な意味をもち、「文化省は人類が生み出した優れた作品に、最大多数の人々がふれられるようにすることに責任を負う。特に、フランスの作品に重点を置く」という方針が立てられ、「すべての文化財の保存と活用、芸術活動や他の創造的活動の奨励、芸術教育の促進」を政策目標にしている。

　以上を簡単にまとめると、文化政策は次の5つの項目に集約されている。

　①創作の促進

　②文化財やモニュメントの保存

　③文化産業の発展、先端技術との融合

　④文化活動へのアクセスの拡大

　⑤文化多様性の促進

これらは、グローバルな経済社会活動に対応する文化の役割を明確にしようとする試みである。特に、経済発展と文化の関係については、芸術と文化を通じて「自己認識」を高めることに力点を置くべきだろう。

次に新しい文化の役割は、社会的統合の実現である。複雑化する社会で、文化によって社会的排除の動きを是正すること、このことの重要性がさらに高まっている。文化は、社会的排除の動きに対応する教育政策の一環として位置づけられなければならない。

　第4章　日本の文化政策をどう強化するか

　以上に照らして、日本の文化政策を強化するためには、次の3つの柱を明確にする必要がある。

1. 産業政策としての役割、特に文化産業の育成

地元に眠る文化資源や文化財を活用した文化産業の（あるいは文化産業としての）育成、それによる地域経済の活性化

1. 教育政策との連携、特に地方の教育現場との連携

日本文化を深く理解できる素地をつくるために、①地方の教育現場との連携、②美術館の教育施設としての発展（＊美術館は、観光施設でも興行施設でもなく“教育施設”である）を促す。国際的に活躍できる文化プロデューサーを育成する。文化施設を海外と相互に連携できるようにする。

1. 文化外交の役割。文化の海外発信に向けて、日本という国への自然な愛情をはぐくみ、より積極的に文化を発信する体制を整備する。

日本文化の発信は、日本の国力、ソフトパワーの源泉である。文化コンテンツの開発、アクセスを増大することは、「開かれた日本」を印象づけることになる。文化行事に国内外の区別がなくなっていることを前提に、国内の文化企画の質的向上と、発信力を高める必要がある。伝統的なものと、現代アートなど新規分野への取り組みを並列させる。

これらをふまえ、海外からの観光客の増大を想定し、「どういう場所」で「何をテーマに」「どういう方法で」文化を演出するかという点をより検討する必要がある。そのときに大事なのは、文化のカテゴリーと同時に、地域の歴史や特色をどう出すかという点である。

1. 「民族の存在様態は、その民族にとって核心的なものである場合に、一定の意味として現れてくる。その一定の意味は、『言語』によって通路を開く。言語は、一民族の過去および現在の存在様態の自己表明であり、民族の文化の自己開示にほかならない。」九鬼周造　（「『いき』の構造」） [↑](#footnote-ref-1)
2. 日本語表現について、例として川端康成「雪国」の表現を上げてみる。この小説の冒頭の表現は、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった（川端康成全集、第10巻9ページ、新潮社、1984年）」これを英語に直すと、

　The train came out of the long tunnel into the snow country. (Y. Kawabata “Snow Country” translated by Edward G. Seidensticker, Alfred A.Knopf, Inc, pp.3, 1969)

　この二つの表現の違いは主語の扱いである。川端の表現は主語を抜き、英語表現では主語がある。これは日本語の表現が論理的でないということではなく、主語のない表現は、川端の新しい文学の世界を作り出した。このことを安西祐一郎先生は言葉の「語力」と言い、フランスのコレージュ・ド・フランスのジャン・ノエル・ロベール先生は「言霊」という表現を使いました。（参照「教育が日本をひらく」（安西祐一郎著、2008年）。 [↑](#footnote-ref-2)
3. ＊『古事記』（8世紀始め）、[天武天皇](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A9%E6%AD%A6%E5%A4%A9%E7%9A%87)の命で[稗田阿礼](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%97%E7%94%B0%E9%98%BF%E7%A4%BC)が「誦習」していた『[帝皇日継](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%B8%9D%E7%9A%87%E6%97%A5%E7%B6%99&action=edit&redlink=1)』（天皇の系、推古天皇まで）と『[先代旧辞](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%85%88%E4%BB%A3%E6%97%A7%E8%BE%9E&action=edit&redlink=1)』（古い伝承、[神話](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E%E8%A9%B1)や[伝説](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BC%9D%E8%AA%AC)）。本文は変体漢文

を主体、漢文で代用しづらいものは一字一音表記。歌謡はすべて一字一音表記。

＊『日本書紀』漢文。[神代](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E7%A5%9E%E8%A9%B1)から[持統天皇](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8C%81%E7%B5%B1%E5%A4%A9%E7%9A%87)の時代まで。政治有力者が主導。

＊『万葉集』（760年ごろ）、万葉文化、寄物陳思（物だけを表面的に歌って思いを表現する）。短い和歌で、表現する。最小限の言葉で表現する。万葉かな。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 時を定めて他界から来訪する[霊](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9C%8A)的もしくは[神](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E)の本質的存在を定義する[[1]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%BE%E3%82%8C%E3%81%B3%E3%81%A8#cite_note-1)[折口学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8A%98%E5%8F%A3%E5%AD%A6)の用語。[折口信夫](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8A%98%E5%8F%A3%E4%BF%A1%E5%A4%AB)の[思想](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%80%9D%E6%83%B3)体系を考える上でもっとも重要な[鍵概念](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E9%8D%B5%E6%A6%82%E5%BF%B5&action=edit&redlink=1)の一つであり、[日本人](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E4%BA%BA)の[信仰](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BF%A1%E4%BB%B0)・[他界](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%96%E7%95%8C)観念を探るための手がかりとして[民俗学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%91%E4%BF%97%E5%AD%A6)上重視される。 [↑](#footnote-ref-4)